



「リケジョ」を応援する

内海房子 Fusako UTSUMI

独立行政法人国立女性教育会館 理事長



女性の活躍推進の呼び声が高まり、国会では今まさに「女性の職業生活における活躍の推進に関する法律」が成立しようとしている。この法律では、事業主に、雇用する女性の活躍状況を公表することが義務付けられ（300人以下の雇用主は努力義務）、これまでの関連する法律（男女雇用機会均等法、男女共同参画社会基本法）から一歩踏み込んだ画期的なものと言える。停滞している日本の男女共同参画の状況を、一気に前進させるバネになるのでは、と大きな期待が寄せられている。

産業界での女性の活躍の中でも、技術部門の遅れは甚だしい。企業側は、女性技術者を採用したくても、そもそも理工系女子が少ないのが問題だという。理工系に女子が少ないのは事実だが、なぜ少ないかという理由の1つに、「女性が理系に行くと職がない」との思い込みがあると聞く。これはとんでもない誤解である。

日本工学教育協会では、2008年から「リケジョ」を増やす取り組みを続けている。最近、送り出し側である大学の理工系女子の就職状況や、受け入れる側である企業の女性技術者の活躍状況について調査した。その結果、理工系女子の就職先は男子と遜色なく多方面にわたっていること、産業界における女性技術者の需要はますます高くなっており、技術部門の受け入れ体制も整ってきている実態が明らかになった。詳細は今年の第63回年次大会で発表されることになっている。両者の思い込みを解きほぐし、問題の真相を明らかにするための重要な手がかりになるのではと思われる。

「リケジョ」が少ないのは、もちろん産業界との誤解だけではない。専攻分野別に見た学生分布（平成26年度）によると、理学・工学へ進む女子は大学に進学する女子全体の6.4%、男子は27.8%である。小、中、高と進む中で、理数系の学科の成績に男女差はほとんどないと言われている。しかし、進学先にこれほどの差が生じるのは、進路を考えるとときに男女に関する何らかのバイアスがかかっているのでは、と推察せざるをえないだろう。

その根拠の1つとして、女子校の事例を見てみよう。男女共学校と比較して女子校の方が理工系に進学する比率が数段高い。これはどういうことか。女子だけだとバイアスがかわらず、本来の適性にあった進路を選ぶことができるという証左ではないだろうか。

どのような環境においても、男女共同参画（Gender equality）の視点で進路選択ができることが望まれる。そのために必要なことは何か、これからも模索を続けていく必要があるだろう。男女共同参画の視点でキャリアを形成することが、女性技術者のみならず多くの女性たちがその力を十分発揮してのびのびと活躍できる社会（男女共同参画社会）の実現へとつながっているからである。

© 2015 The Chemical Society of Japan